

式 辞

おはようございます。

2学期の終わり、令和元年の終わりに当たり、今年出会ったとても心に残った一文を紹介します。

出典は『遊行の門』 「遊ぶ」に「行く」で遊行です。

1966年下半期の直木賞作家、五木寛之氏の文です。それでは、朗読します。

“かつて私が読んだ本のなかに出てくる一つのエピソードが、いまでも私の心に残っている。そのことについては、これまでも何度も書いたり、語ったりしてきた。しかし歳月がたってもその記憶が薄れないのは、なにかとても大事なことがそこにあるからだろうと思う。

アイオワ州立大学のディットマーという科学者がおこなった実験の話である。

幅30センチ四方、深さ56センチの植木鉢に、一本のライムギの苗を植える。そして水をあたえ四カ月たった後に、育ったライムギをだし、鉢のなかに張りめぐらした根の長さを計るのだ。

顕微鏡でなければ見えない微細な根毛まで正確にカウントする。そして鉢のなかにライムギがどれほどの根を張りめぐらせて、小さなその命を支えてきたかを計算する。すべての根の長さを合計したところ、その総延長は、なんと一万一千二百キロに達した、というのである。

鉢のなかの砂に、隅々まで張りめぐらされた根。

一本のライムギが生きるためには、気の遠くなるような根の営みがあったのだ。その細い根から鉄分や、水分や、カリウムや、その他もろもろの成分を吸いあげ、ライムギの命が支えられる。

その麦に、実がたくさんついていないじゃないか、とか、形が貧弱じゃないか、とか、文句をつけることができるだろうか。

生きる、ということは、それほど大変なことなのだ。一本のライムギが四カ月生きるだけに一万一千二百キロの根。

私たち人間も同じ生命を生きる。その体は麦にくらべると、とほうもなく大きい。そして、食物、太陽の光、空気、水、などを採るだけではなく、私たちは愛情とか、希望とか、理想とか、さまざまな精神的なサポートをも必要とする。

いったい、わたしたちは一個の生命体としてどれほどの根をこの世界に張りめぐらせて生きているのだろうか。

私たちは目に見えない触手を、八方宇宙にのばし、張りめぐらして、そして生きている。眠っている間も体は働き、免疫の体系は休みなく連動し、脳も、一本の髪の毛も必死で生きている。

そう想像すると、生きているということは、それだけで、じつに凄いことではないか、と自然に思われてくるはずだ。

いまを生き、なんとか明日も生きようとしている人間に、私は心の底から敬意を表したいと思うのだ。人は生きているだけで価値がある。そんな自分を尊敬し、大事にしなければ。”

以上です。

「凄いな」というのが読み終えた素直な感想でした。そして自分を尊敬し、大事にすることは、同じように他人も尊敬し大事にすることだとも思いました。12月には人権週間がありましたが、人権の基本はこのことに尽きると思います。(間をおく)

ところで、この一文は小論文問題集で目にしました。「受験勉強」は大変というイメージがありますが、自分の視野を広げる貴重な機会、時間となりうるものだと改めて思いました。

3年生の皆さん。現役生はようやく今から、これまでばらばらに学んだことが結び付き、学力になります。皆さんの進路希望が実現することを願っています。

1、2年生の皆さん。勉強は面白いものです。好奇心をもって向かってください。

それでは、1月7日に元気な姿で会いましょう。